

歴史を感じるまち

古くからの地名や道端の石碑などには、歴史を知る手掛かりが残されています。いにしえに想いをはせながら、まちを歩いてみませんか。



粕壁宿

日光道中の道しるべ

C-3

旧商家東屋田村本店前の道しるべ。天保5年(1834)のもので、日光・岩槻・江戸の三方向の方角が刻まれています。

☒ 春日部駅東口から徒歩約5分



日光道中・粕壁宿は、江戸日本橋から数えて4番目の宿場町でした。江戸を早朝に出た旅人の多くは、夕刻頃粕壁に到着し宿泊したといわれています。旅籠(はたご)45軒、そのほか問屋・小売業などが軒(のき)を連ね、にぎわっていました。

まちなかを巡るガイドツアーのお申し込みはぶらっとかすかべへ。



文化財マップ
市内の指定文化財について解説



松尾芭蕉と粕壁宿

松尾芭蕉(まつおばしゅう)は江戸時代の俳人。晩年の元禄2年(1689)『おくのほそ道』の旅で一行は粕壁宿で1泊目を過ごしたとされています。宿泊した場所については、東陽寺や小淵山観音院のほか諸説あります。



シャッターアートに描かれた芭蕉

東陽寺

C-3

境内に「伝芭蕉宿泊の寺」と彫られた標柱や「曾良(そら)旅日記」から「カスカヘニ泊ル」の一文を刻んだ碑があります。

☒ 春日部駅東口から徒歩約15分



小淵山観音院

C-2

境内に「ものいへは唇寒し秋の風」の松尾芭蕉句碑があります。また、江戸時代前期の円空仏は、五月の円空仏祭で公開されます。

☒ 北春日部駅東口から徒歩約20分



春日部 の名前の変遷

春日部の地名の由来は、河川流域の地形を表す「カス」「スカ」「カワベ」から起こったとする説がありますが、今から1,400年以上前、古墳時代の皇族、春日山田皇女(かすがのやまだひめみこ)の私有民である部民(べのみ)がいたことから「春日部(かすがべ)」になったといわれています。のちに平安時代末に当地に来た大井氏の一族が、土地の名である「春日部」を名乗ったと考えられます。戦国時代から江戸時代にかけて「糟ヶ邊」「糟壁」「粕壁」と変化し、昭和19年に内牧村と粕壁町が合併した際、再び「春日部」となりました。



春日部八幡神社

C-2

元弘年間(1331~1334)ごろ、鎌倉の武士春日部氏が鎌倉鶴岡八幡宮を勧請して築いたという由緒ある神社です。八幡公園付近で発掘された遺跡や建物跡は、春日部氏の館跡(かんせき)の一部だと考えられています。

☒ 八木崎駅から徒歩約4分



最勝院

C-2

南北朝時代に後醍醐天皇(ごだいごてんのう)に味方して戦った武将、春日部重行公(かすかべしげゆき)の墓と伝えられる塚があります。

☒ 春日部駅東口から徒歩約10分

在原業平と東下り伝説

在原業平(ありわらのなりひら)は平安時代初期の貴族で『伊勢物語』の主人公とみなされています。在原業平が遠く都を離れ旅しているときに、隅田川(現在の古隅田川)に遊ぶ都鳥(ユリカモメ)をみて、故郷を懐かしみ歌を詠んだという故事が伝えられています。



春日部八幡神社の都鳥の碑

C-2

参道入口には、在原業平の故事を伝える石碑があります。

☒ 八木崎駅から徒歩約4分



江戸時代、新方袋村の名主家に伝わった在原業平の掛軸の一部です。

梅若丸と梅若伝説

謡曲『隅田川』で有名な伝説です。京都の貴族の子、梅若丸(うめわかまる)は人買いにさらわれて、隅田川のほとりで命を落とします。梅若丸を追ってきた母がそのことを知り、池に身を投じてしまうという悲劇です。



満蔵寺の梅若塚

B-2

入口右手に、梅若丸を祀る梅若塚と柳の木があります。

☒ 八木崎駅から徒歩約25分

河岸として栄えた宝珠花



西宝珠花の町並み

F-1

江戸を洪水から守るため江戸川が開削され、東と西に分断された宝珠花。「ほうしゅ(ばな)」の地名の由来は、舟の帆を干す「帆干(ほうぼし)」という音からきているという言い伝えもあります。かつて江戸へ穀物などを運ぶ河岸として栄えていました。当時の町並みがあった場所は、堤防の拡張工事のため河川敷になってしまいましたが、集団移転して当時の面影を残しています。

☒ 春日部駅東口から関宿中央ターミナル行きバス(約22分) 宝珠花入口下車

